

読めることで広がる可能性

—高等部卒業後の生活をより豊かにするために

三重大学教育学部附属特別支援学校
達 直美

はじめに

本校は、知的障害や知的障害を伴う自閉症のある児童・生徒が多く学んでいる特別支援学校です。「社会の中で、自分らしく、たくましく生きる子どもの育成」を教育目標に掲げ、子どもの実態に即して、領域・教科を合わせた指導である日常生活指導・生活単元学習・作業学習を中心に授業を行っています。小学部、中学部、高等部があり、児童・生徒数は55名です。

2012年度から2年にわたり、高等部で担任をしているクラスの生徒8名を中心にマルチメディアDAISY図書の活用に取り組んでいます。

本校のICT教育における環境は、まだまだ十分ではありませんが、今年度ワーキンググループができ、これからのICT教育の体制を整える基盤ができあがってきました。また、2012年度から他機関の協力を得ながら情

報端末機を活用し、単に「できる・できない」ではなく、生徒の可能性を探りながら、個々の課題に対応できる支援を繋げることの大切さを実感しているところです。

さらに、卒業後の生活を視野に入れて、培った力を学校だけでなく生活の場や地域の場に汎化し、豊かな将来へつなげることも求められていると考えています。

研究の内容

(1) 活用の目的

①マルチメディアDAISY図書を活用して、本を読むということに親しむ機会をもち、学習への関心や興味関心の幅を広げる。

②マルチメディアDAISY図書を活用して、どのような学習効果が得られるかについて検討する。

③マルチメディアDAISY図書を活用して、どのような内容がどのような実態の生徒に適しているかについて

検討する。

(2) 活用の場面

【学校】

- 日常生活…月曜日～金曜日の朝の会において、後半の15分を捻出して、群読をしたり劇の発表をしたりする際に、マルチメディアDAISY図書の活用を行いました。

※この後半の時間は、日々の教育活動においての事前・事後学習にも活用していますので、毎日実践したわけではありません。

- 課題学習…個のニーズに応じて編成された将来就労を希望する子どもの学習グループにおいて、国語の読み聞かせなどでマルチメディアDAISY図書の活用をしました。

【家庭】

- 週末の家庭学習や長期休業中の家庭学習で貸し出しました。

(3) 活用の方法

【学校】

iPadをプロジェクターにつなげ、大きい画面を活用しました。

【家庭】

iPadを持ち帰り、iPadそのものの画面を活用しました。

「ていねいに大切に使う」「充電を必

ずしておく」「時間を決めて使う」などのルールをつくりました。

(4) 活用の実際

- ①マルチメディアDAISY図書を活用して、本を読むということに親しむ機会をもち、学習への関心や興味関心の幅を広げる。

【劇の発表での活用】

クラスの取り組みです。みんながよく知っている本や言葉遊び的な本を選び、音声を聞きながら目で追うことから取り組み、慣れてきたときにハイライトに沿って音読を行いました。ストーリーをよく知っている『おおきなかぶ』は繰り返しフレーズがとても気に入っており、日に日に読み方も上手になってきました。

「劇を全校集会で発表してみようか？」と投げかけると「やってみたい!」「できるかなあ」という生徒の声があがりました。

そして、3年生になって初めての現場実習が終わり、学校に戻る初日の登校日の全校集会で発表することになりました。

目標ができたことでやる気もひとしおでした。練習を3週間していない状況での発表は不安でしたが、マルチメディアDAISY図書を活用することで、台詞を覚えるプレッシャー

はなくなりました。

ナレーターがハイライトに沿って文章を読み、演技をする子どもは、画面を見ながらセリフをいうことで安心感を持って取り組めたのです。

やり終えた子どもたちは、直前の練習をしなくてもできたことに少なからず自信を持ったようでした。

最後に「自分たちもできた！」という達成感でいっぱいの表情を見せました。



「おおきなかぶ」の劇の発表

【課題学習での本読み】

課題の学習グループの9名は、本を読む習慣の少ない子どもも多く、9名

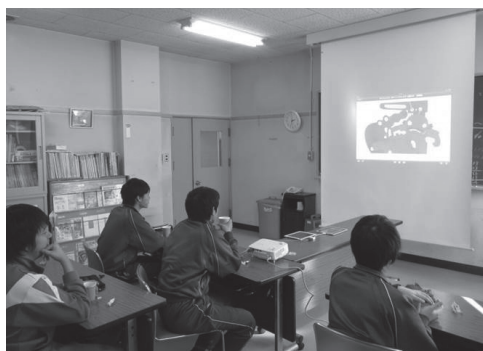
中「読書をしますか？」という質問に「ハイ」と答えた子どもは4名でした。そのうち一人は文字のない図鑑や写真を見ることが好きな子どもでした。

毎回学習の時間にマルチメディアDAISY図書を活用することはできませんでしたが、読みへの困難さを抱える子どもにとって、音声で聞くことができ、本への抵抗感がなく取り組むことができました。

この学習グループでも、子どもから「劇がしたい」という声上がり、1学期のおおきなかぶの発表が子どもの興味関心を促すことに少なからず繋がっているのではないかと考えました。

また、この学習グループでは、マルチメディアDAISY図書で短い文章の本を読み、登場人物や感想を言いつつ練習もしました。

教師の言葉がけも必要ですが、継続して行うことで感想やあらすじが言えるようになっていくと感じています。



『11ぴきのねこ(紙芝居風)』の読み上げ機能を楽しむ様子

②マルチメディアDAISY図書を活用して、どのような学習効果が得られるかについて検討する。

【視写に活用する】

高等部での国語・数学的な基礎学習を行う課題学習は、週2時間しかありません。その2時間も学校行事などでつぶれてしまうことも多く、基礎基本の学習を補償することがなかなかできない現状があります。

そのため、クラスの朝の会の後半15分を個に応じた課題に取り組む時間として工夫をしています。8名中将来、就労を希望する生徒が4名いますので、宿題を出したり、iPadの学習アプリを活用したり試行錯誤しながら取り組んでいます。その一環として取り組んでいる視写の個別学習を紹介します。

対象：

文字を丁寧に書けるのに、板書した文章をノートに書き写したりする際は脱字したりゆがんだりしてしまうAさん。

目的：

- 集中力をつける。
- 文字を上手に書く。

方法：

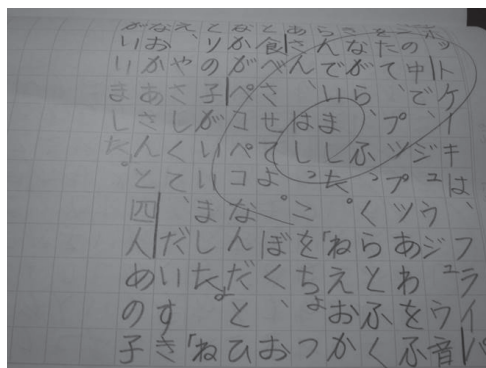
ハイライトを見ながらノートに視写する。わからない場合は繰り返し、ハイライトを戻して落ち着いて字を書く。

成果：

- ハイライトがあるので今どこを書いているか混乱することなく、一人で学習が進められた。
- 丁寧に字を書くことができた。
- 書き終えた後に、自分で誤字脱字がないか振り返ることができた。

課題：

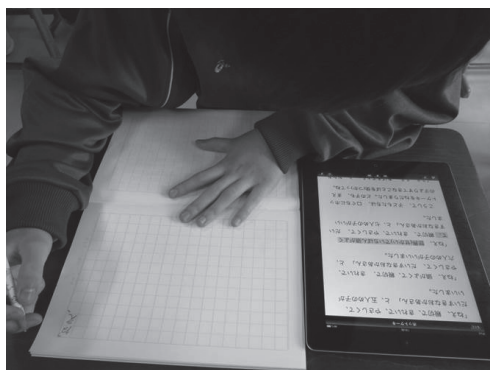
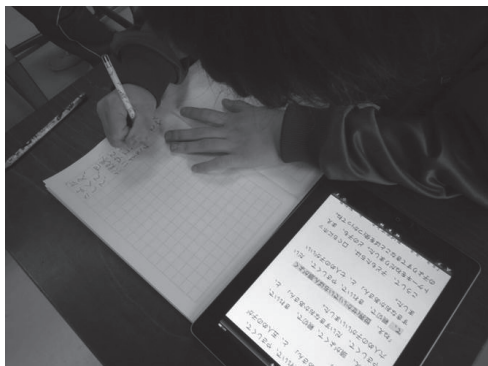
- 文章の内容を読み取れるようになり感想がいえるようになる。
- 持続力をつける。
- わからない漢字を覚える。



『ホットケーキ』(2012年Ver.2 東京子ども図書館)より

自分から新しいノートを用意し、やる気を持って取り組み、「今日は習いごとがあるからできません。明日してきます」と計画を立てて取り組もうとする姿がありました。

iPadがもっとたくさんあれば、個に応じたマルチメディアDAISY図書の活用の幅は、さらに広がるのではないかと感じています。



ホットケーキの視写に取り組んでいるAさん

③マルチメディアDAISY図書を活用して、どのような効果や内容が子どもに適しているかについて検討する。

クラスには8名（自閉症6名、知的障害2名）の生徒が在籍しています。

意思表示の有無など、実態はさまざままで、A1～B1の療育手帳を所持しています。どの生徒にも適していたことは、「絵があること」と「時間の短い文章であること」でした。

マルチメディアDAISY図書 「わいわい文庫」を活用してみた

(1) 効果がある機能について

- ハイライト機能があること
- 読み上げ機能があること
- スピードの調整ができること
- 文字が拡大・縮小できること
- ページをめくらなくても自動的に場面が変わること
- いろいろな機器で活用できること（iPad・PC・プロジェクター・テレビなど）

(2) どの子どもも興味関心をもって取り組めたもの

障害の重い子どもも絵をみて楽しんだり、紙芝居風のセリフを聞き入ったりするなどの様子が見られました。集中が持続するのは10分～13分程度でした。

また、セリフの繰り返しのあるものや擬音のあるものは、関心をもって聞くことができました。

(3) どの子どもの実態にも共通する本

→絵がきれい・繰り返しのセリフ

『えほんあいうえおにぎり』（9分）

『おおきなかぶ』（7分）

『おおきなかぶ 紙芝居風』（6分）

『わにさんどきっ はいしゃさんどきっ』

（8分）

(4) 意思表出が難しい障害の重い子どもにも活用した本

→ 5分以内・生活に密着した簡単な内容

『かわいいおやこ』(4分)

『はたらくくるま』(4分)

『やおやさんでおかいもの』(4分)

など

(5) 文字理解のある子どもが関心もって取り組んだもの本

→ 紙芝居風が聞き取りやすかったようである

『11ぴきのねこ 紙芝居風』(11分)

(11ぴきのねこの他のシリーズも同様)

『ホットケーキ』(17分)

『浦島太郎』(13分)

高等部段階の教材として、簡単な内容のように感じられるところもありますが、日頃から本に親しむこと

のない生徒たちにとって、文字だけの長文の本には抵抗感があります。楽しい、おもしろいと感じられる本から成功体験を積むことが大切であると考えて取り組んでいます。

おわりに

電子図書の活用は、特別支援学校においてまだ広がっていない状況ですが、高等部の生徒にとって、卒業後の余暇の過ごし方や就労先での休み時間の過ごし方などに活用していく可能性を実感しています。

自分で操作でき自分で読むことや聞くことができ、そのことで、興味関心が広がり、新たな人や物や事への出会いから、より豊かな生活につながるのではないかと考えます。

そのためには、今後、電子図書の活用への理解啓発を実践者から発信していくことが必要であると思います。